
婦人会報

立教185年 3 月 令和四年
2022年



天理教婦人会旭日支部

通巻513号

四月例会案内

日時 四月五日（火）午前十時
場所 旭日大教会
内容 教祖祭
よろづよ八首

（御本部へ移動）

本部西礼拝場にてお願いいたします。

本部ひのきしん（回廊拭き）

お弁当配布

- ※ 社会状況により変更になる場合がございます。
- ※ 膝当てをお持ちの方は、ご用意下さい。
- ※ お弁当は二十四日までに直属教会を通してお申し込み下さい。

四月例会役割

扨者	藤井 綾子	生駒 恵美子
賛者	吉田 せつ	松田 よし子
指図方	松田 和代	



今月の表紙より

菜の花の花言葉のひとつに、「小さな幸せ」とあります。菜の花の見た目通り、一つ一つの花が小さいことと、身近にあることが由来と言われています。3月は出会いと別れの季節でもあります。自分の周りにある変わらないものを大切に、喜びを感じ、感謝をすることで、新しいことを丁寧に受け入れることができるのだと思います。そんな節目に菜の花は元気いっぱいに咲いて見せてくれています。



女子青年案内

webブックレット『Blossom-litter-no.10』を配信しました。女子青年アンケート「好きな逸話篇」第2位を発表しています。女子青年オープンチャットが大教会ホームページからご覧下さい。



天理教婦人会第104回総会

総会には、支部の代表に参加して頂きます。

総会で頂いたお言葉、ご挨拶は、代表の方から支部へ伝えて頂きます。今年の総会も新型コロナウイルス感染症の影響により、大勢が集うことは叶いません。しかし、その中だからこそ、それぞれがおちばに心をつなぎ、また、おちばの理を戴く教会につながりましょう。そして、心を揃えて歩ませて頂きましょう。

■日時 立教185年4月19日（火）午前10時30分

■場所 本部中庭

※支部の代表以外の方はご遠慮下さい。

※記念行事はありません。

第51回少年会旭日団総会

■日時 令和4年3月29日（火）

■場所 天理教旭日大教会・神殿

■時間 09:30 受付

10:00 開会

11:30 閉会・解散予定（弁当配布）



■内容 式典・おつとめまなび（座り勤め、よろづよ八首の総立ち）
抽選会

※以上の行事におきましては社会状況により内容の変更などある場合もあります。

「おつとめの心構え」

vol. 4

今回は「よろづよ八首」について述べさせていただきます。

よろしく
お願いします



●よろづよ八首(明治三年) 【参考文献『みかぐらうたの世界をたづねて』道友社編】

この世の元初まりの真実を教えて、世界をたすけるという、立教の本来の意味を明かされています。明治二年から筆をお執りになった『おふでさき』第一号一、八とほぼ同じです。

◎よろづよのせかい一れつみはらせど むねのわかりたものはない

(通釈)いつの代の世界をくまなく見渡してみても、だれ一人として、神の思いの分かつているものはない

◎そのはずやといてきかしたことハない しらぬがむりでハないわいな

(通釈)そのはずで、いままで説いて聞かしたことはないのだから、何も知らないのは無理もないことである

◎このたびはかみがおもてへあらハれて なにかいさいをとぎゝかす^{※1}

(通釈)このたびは、神が表へあらわれて、何もかも詳しく説いて聞かせよう

※1 「このたび」

※2 「このところ」

|| 教祖がおいでになられた

ところ。大和国山辺郡庄

屋敷村、当時の中山家五

番屋敷。

◎このところやまどのぢばのかみがたと いうていれどももとしらぬ

(通釈)この所を大和のぢば、かみがたと言っているけれども、その元は知るまい

◎このもとをくはしくきいたことならば いかなものでもこいしなる

(通釈)この元を詳しく聞いたことならば、どんな者でも皆恋しくなるであろう

※3 「かみがた」

|| 神館の詰まったもの。神

様がおられるところ。

◎きゝたくバたづねくるならいうてきかす よろづいさいのものとなるを

(通釈)聞きたければ、たずねてくるがよい。そうしたならば言つて聞かそう、すべてのことがらの根源を

◎かみがでゝなにかいさいをとくならば せかい一れついさむなり

(通釈)神が表へ出て何もかも詳しく説くならば、世界中の人間は皆心が勇み立つてくる

◎一れつにはやくたすけをいそぐから せかいのころもいさめかけ

(通釈)神は一れつ人間のたすけを急いでいるから、世界中の人々の心も勇めかけよう



※よろづよ八首は、明治三年にお教え頂きました。十二下りの「だし」つまり出だし、導入部分、また総論として、既に

慶応三年に教えて下さっていた十二下りの初めに加えられました。立教の宣言、ぢばの意義、つとめによる陽気ぐら

し世界の実現について歌われています。たすけの根本として教えられたものがつとめであり、そのつとめの理合いを分か

りやすく、元初まりの話によつて説き明かされ、つとめを勤めるによつて、世界の人々の心も勇ませようと仰つて下さつ

ています。

心の皺を

—逸話篇四五より—

教祖は、一枚の紙も、反故ほうぐやからとて粗末になさらず、おひねりの紙なども、丁寧に皺を伸ばして、座布団の下に敷いて、御用にお使いなされた。お話に、

「皺だらけになった紙を、そのまま置けば、落とし紙か鼻紙にするより仕様ないで。これを丁寧に皺を伸ばして置いたなら、何んなりとも使われる。落とし紙や鼻紙になったら、もう一度引き上げることは出来ぬやろ。」

人のたすけもこの理やで。心の皺を、話の理で伸ばしてやるのやで。心も、皺だら

けになったら、落とし紙のようなものやろ。そこを、落とさずに救けるが、この道の理やで。」

と、お聞かせくだされた。

ある時、増井りんが、お側に来て、「お手許のおふでさきを写さして頂きたい。」とお願いと、

「紙があるかえ。」

と、お尋ね下されたので、「丹波市へ行って買おうて参ります。」と申し上げたところ、

「そんな事しては遅うなるから、わしが括くってあげよう。」

と、仰せられ、座布団の下から紙を出し、大きい小さいを構わず、墨のつかぬ紙をよりぬき、御自身でお綴じ下されて、

「さあ、わしが読んでやるから、これへお書きよ。」

とて、お読み下された。りんは、筆を執って書かせて頂いたが、これは、おふでさき第五号で、今も大小不揃いの紙でお綴じ下されたまま保存させて頂いている、という。



「人だすけの際も、たとえ時間はかかるうとも、病む人や悩める人に寄り添い、誠実を尽くして、心の皺を丁寧にはばすが如くに、じっくりと教えを伝えていくことが肝要なのでしょう。」

道友社『逸話のこころたずねて』より引用

「皺」はちょっと伸ばしても、すぐに元に戻ってしまいます。人間の心の良くない癖や性分に似ています。

「心の皺」は、ほこりの心遣い、癖、性分、いんねんといったものが原因ですから、教祖の教えを何度も聞かせて頂く事によって心の皺を伸ばし、をやの思いに沿って心を定める事によって、鮮やかな御守護を頂けるのだと思わせて頂きます。

「心澄み切る教やで」

心澄み切りたらば、人が何事
言うても腹が立たぬ。それが
心の澄んだんや。今までに教
えたるは腹の立たぬよう、何も
心に掛けぬよう、心澄み切る
教やで。

(おさしづ 明治20年3月22日)

発 行 所	発 行 者	発 行 日
天理市田井庄町一二八 天理教婦人会旭日支部	岡 本 道 子	令 和 四 年 三 月 五 日